

日本が世界に誇る作曲家・武満徹。その魅力は曲中にちりばめられた魅惑的な響き、そしてひっそりと現れる「歌心」にある。没後 26 年を経てもなお愛され続ける武満の音楽とは！？

## 贈られたピアノ

終戦後の若い頃、武満はピアノが買えず、町でピアノの音が聴こえると、その家へ行きピアノを弾かせてもらっていた。武満本人は「1 軒も断られなかったから運がよかった」と語るが、友人によると、何度も続くと「もう来ないで」と断られていたとか……。それを知った先輩作曲家・黛敏郎は武満にピアノをプレゼントしたという、心温まる逸話が残されている。

## 熱狂的阪神ファン

映画「燃える秋」の主題歌のレコーディングを終えた武満はご機嫌な様子。その理由は、主題歌を歌ったメンバーが全員阪神ファンだったから。また、武満はギタリストの荘村清志のために曲を書く約束をしていたが、酒の席で荘村が巨人ファンであることを知ると「じゃあ書くのやめた。僕は阪神だから」と。慌てた荘村が「今日から阪神ファンになる。」と言うと「それならいいだろう」とやっと作曲をしてくれたという。

# 武満徹の秘密

## 映画音楽の巨匠

武満は大の映画好きで、生涯に手掛けた映像のための音楽はなんと 100 あまり。武満はあの巨匠・黒澤明監督と作りたい音楽のことで何度も喧嘩したというから驚きだ！黒澤明の『どですかでん』『乱』勅使河原宏の『砂の女』など武満が手がけた映画史を彩る作品は、高く評価され、先鋭的かつ綿密な仕事にも高い関心が寄せられている。

## 《二つのレント》

1950 年、デビュー作の《二つのレント》を批評家から「音楽以前」と酷評されて絶望した武満。この時の心境を「目の前が真っ暗になって…。目の前にちょうど映画館があったから、切符を買って中に入って、真っ暗い中で、一人すみっこで泣きたいだけ泣いてね…。もうおれは音楽をやらなくてもいいと思ったの」と当時を振り返る。《二つのレント》の楽譜はその後失われてしまったが、1989 年に武満自身が再構成したのが《リタニ》という訳だ。

